りぷろ■にゅうす

2015. 11 月号 Vol. 39
編集・発行／リプロネットみやぎ

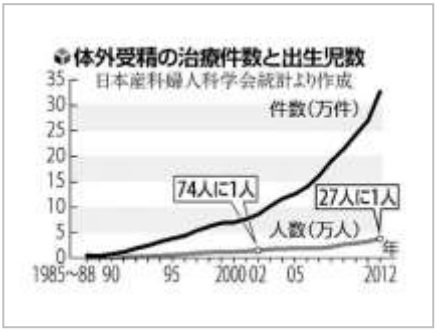
CONTENTS

リプロ「女性の健康」連続講座
■第 1 回開催報告
■第 2 回開催報告

リプロ「女性の健康」連続講座　開催報告

第 1 回： 基本の「き」～私の生涯にかかわり続ける「リプロ」とは～
性ホルモンから見る女性のからだと健康

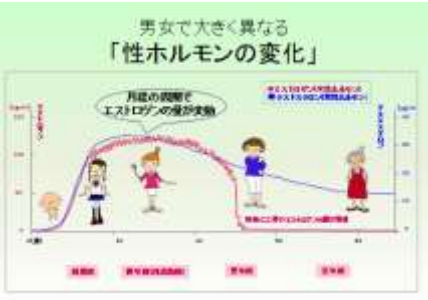
9 月 26 日（土）から、リプロネットみやぎとして初の試みである「リプロ『女性の健康』連続講座」が始まりました。第 1 回目は村口代表が講師を務めました（エル・パーク仙台「特別会議室」）。20 名を定員とした会場でしたが、一般参加 17 名、会員参加 7 名で、当日参加もあり席が足りなくなる、、、という嬉しい「不足」事態でした。参加者は 10 代の高校生から 60 代の経験豊富な女性、また、性教育を研究しているという男性の参加もあり、幅広い世代と社会的立場の方々で盛り上がりました。その内容の一部をご紹介します。



「27 人に 1 人」という数字をみなさんご存知ですか。これは「体外受精によって産まれる子どもの割合」です。近年、女性の社会進出や自己実現が可能になったことで、結婚や出産年齢の高齢化が進み、妊娠・出産が難しくなってきている現実を示しています。女性たちが働き、自己実現を目指していることは歓迎すべきことですが、気づくと結婚が遅くなって、妊娠を考えた時にはなかなか妊娠しない、そうしてしばらくぶりに病院に行ったら大きな筋腫が見つかったという話は結構あるんです。一生懸命生きてきた女性たちなのに、女性として妊娠を考えた時に可能性が「閉ざされている」という現実に向き合ってきて、今回の連続講座の着地点を「私らしく生きるために」「私らしく輝いて生きるために」「私の可能性を閉ざさないために」としました。

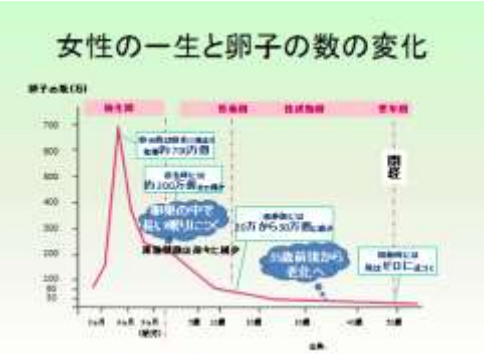
リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは、直訳すれば「性と生殖の健康と権利」ですが、それはつまり生命生産をする「女性の健康と権利」という意味で使われ始めました。そのことが登場した背景には大きく 3 つあります。まず「1.女性たちの運動」がすでにあり、そこに「2.WHO による健康問題についての幅広い調査研究」が行われて基礎が作られ、「3.国連の動き―女性の権利は人権―」という男女平等の流れが徐々に広がってきたということです。

最近ではさらに進化し、女性だけではなく男性をも含む「性の健康」という包括的概念の中でリプロダクティブ・ヘルス／ライツを捉えるべきであるとされ、いまだ発展途上にあるのです。

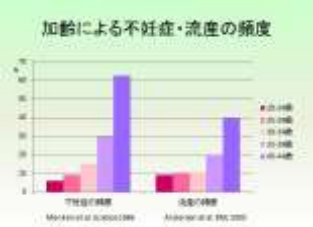


さて、こちらのグラフのギザギザ、何か分かりますか。これは女性ホルモン「エストロゲン」の月経周期をあらわしたものです。そもそも女性の性機能というのは妊娠するためのもので、月経があるということは、妊娠しなかったということです。その時からまた「卵胞ホルモンエストロゲンが働き、ピークを迎えて黄体期が終わりまた月経が来る」ということを繰り返しているのです。

さてここで「多すぎる月経」ということについて考えていきます。先ほども述べました通り、女性の性機能は妊娠するためのものですが、なかなか妊娠しないと卵巣は休むことなくフル回転し続けます。もし 1 回妊娠すれば、妊娠中、そして授乳中も一般的にはしばらく排卵が起きませんので、約 2 年間は卵巣がお休みします。ところが女性たちが仕事や自分の自己実現のために一生懸命頑張って、なかなか妊娠する機会を作らずに卵巣を働かせ続けると、健康上の問題もいろいろ起こり始めます。「自然」の状態で女性が生涯に経験する月経は 40～50 回だそうですが、現代は 400～500 回だそうです。



卵の老化についてもみていきましょう。胎生期に一番卵の数が多く、700 万個と言われています。そこから出生時 200 万個まで減少し、そこから月経が始まるまで卵巣の中で長い眠りにつきます。その間にも原始卵胞は徐々に減少して思春期には 20 万から 30 万個になります。そこから 35 歳前後を境に老化に向かいます。ここで卵の老化について数だけを見てきましたが、母体の加齢により質も低下します。



これは加齢による不妊症や流産の頻度のグラフですが、加齢とともに頻度は上がります。私が市立病院にいた頃、どのくらいの頻度で流産が起こるのか 10 年間のデータをとったことがあります。9.6%とか 1 割程度でしたね。生命生産には必ずロスがあるもので、もちろん流産して悲しいけれども卵の問題で自然淘汰された結果であり、自然というのはそういう厳しいものだということです。私たち人間は感情が豊かになって、流産することをとても悲しみます。しかし自然の摂理によって流産することで良質の命を世に送り出しているということにもなるのです。ということで流産はその当時から 1 割程度あったのですが、年齢と共に上がっていくという現実があります。ここまで女性の話ばかりしましたが、最近では「精子の力『35～40 歳から衰え』」という研究結果が発表されました。男性の精子の力にエイジングの影響はあるのだろうということです。

みなさんが自分らしく輝き、可能性を閉ざさずに生きていくために「気づき、考え、判断し、行動し、伝えよう リプロダクティブ・ヘルス/ライツを」ということで締めさせていただきます。

【アンケート回答から】

○知らないことばかりで非常に勉強になりました。リプロダクティブ・ヘルス/ライツという言葉を知っただけでも来た価値があったなと思いました。（10 代・女性）

○これから始まる残り 5 回の講座も楽しみにしています。娘が 3 人いるのでこれからの思春期や自分の更年期に起こるであろう問題を勉強したいです。（30 代・女性）

第 2 回：「性ってなあに？」～思春期のこころとからだ SOS～

10 月 31 日(土) エル・パーク仙台「セミナー室」において、連続講座第 2 回目が開催されました(一般参加11名・会員参加 5 名)。講師は、リプロネットみやぎ副代表であり、長年学校現場で養護教諭として思春期保健に関わってきた北村志津枝さんです。初めて聞く思春期の現状を聞いたり、実際の重さの胎児の人形に触れたりすると、「え～・・・」「わぁ！」と驚きの感嘆詞が飛び交った会でした。

○気持ちがわかりにくい今の子どもたち

私は約 38 年間、主に中学校で養護教諭をしてきました。教諭になった頃は、中学校はとても荒れていましたたが、子どもたちが自分自身を素直に表現してくれた時代でした。今は荒れた気持ちがなかなか表面に出てきません。我々大人がセンサーを鋭くしていかないと、子どもたちの変化が見えにくくなっています。

○人間の性とは何か

「性」の意味は 3 つの視点から捉えることができます。1 つは SEX=「生殖の性」、2 つ目が GENDER=「男女の性役割」、3 つ目が SEXUALITY=「全ての人の性的生き方・人間の性にまつわるすべて」です。
学校では生殖の性は取り上げられますが、性に伴う快楽についての話は、非常に避けられます。身体の接触がなくても、共にいること、会話をすることも性の快楽・コミュニケーションです。そうしたパートナーとの関係性も含んでの人間の性なのです。

○思春期の問題

今は思春期が非常に長くなっています。身体の変化に心がついていかなくて様々な問題や課題も出ています。

<u>性の商品化</u>

女の子を騙す方法が非常に巧みになってきていて、仙台でも普通の中学生や高校生たちが被害に遭っています。性に関する危険がこどもたちの身近に潜む時代になっています。

<u>中絶や感染症の問題</u>

10代の中絶の問題は相変わらずあります。子どもたちにきちんと性教育を受けさせず、起こってしまったことだけ責めても何の解決にもなりません。フランスなどではきちんと性教育がなされた上で、中絶の許可週数は 12 週。日本では 22 週未満です。

性感染症については、女性の膣の部分は粘膜なので、成人女性と比べると、10 代の未完成の臓器の人たちの方が非常に傷つきやすく、感染しやすいというリスクがあります。

<u>デートレイプ・DV など</u>

中学校まではなんとか歯止めが効きますが、高校生になるとたががはずれたように性行動が活発になる子が多くなります。デートレイプの被害に遭う子、ちょっと手軽なアルバイト感覚で JK おさんぽなどに手を出し、強姦の被害に遭う子、そんな事件が多発しています。

恋人関係になった男の子から、命令される、携帯の履歴を全部消されるなどの精神的抑圧も DV です。

男の子の問題

不登校やいじめの問題にはなにがしかの性の問題が隠されています。みんなの前で屈辱的な行為を受けても、男の子同士の遊びとして、先生や親にも辛い気持ちを理解してもらえない。そうした事例は数多くあります。包茎やマスターベーションのことを真剣に悩んでいる男の子も多いです。

この時期の性や友人関係の悩みを気軽に相談できる場が必要と感じます。

家庭の問題

親の再婚などを思春期独特の潔癖感で受け入れられない。まわりの大人がそうした気持ちを理解してほしいですが、なかなかそこに至らないようです。また、特に母子家庭では貧困の問題が大きい。震災後、更に就学援助を受ける家庭が増えています。

○進まない性教育

教員養成課程では性教育に関する講座は必修ではなく、学習指導要領にも性教育という項目がないため、現場で性教育を行うのが難しい状況です。平成 15 年に性教育のバッシングが起こって、学校側や教育委員会の自主規制は今も続いています。

中学校の学習指導要領が変わり、保健体育の時間数は増えましたが、実技の体育が増えただけです。性教育など保健分野の授業数は前と変わりなく、1 時間に 2 ページというスピードでは、こどもたちの身につく指導はできません。それでも義務教育のうちに、性の基礎学力をつけさせたいと思っています。性教育は長い期間がかかり、即効性はありませんが、やり続けなければこどもたちは落とし穴に落ち続けます。

リプロの活動に関わってくれた方々がこうした現状を改善する盾となって、性教育の必要性を広めてもらえたら嬉しいと思います。

【アンケート回答から】

○養護教諭を目指しているため、養護教諭の実際の体験や現状などを聞くことができて、性について学びを深めることができました。（20 代・女性）

○性産業にさらされ、また生活格差などでも若い男女が「性」をきちんと教えられたり、学べたりする場所がなく大人になっていき、そのことでさらに望まない「生」が産みだされていくこと、また自分を大切にすることの必要性をあらためて確認できた。（60 代・女性）

＝＝

【編集後記】

9 月から始まった、リプロ「女性の健康」連続講座は、これまで以上に幅広い世代で参加者が集まり、自由に発言、質問などが出し合える雰囲気になっています。参加者の皆さんは、それぞれに何かを得たようです。次回以降もまだ空きがございますので、ぜひ身近な人にお声掛けください。

リプロネットみやぎ事務局
FAX：022-292-0167
e-mail：repro@muraguchikiyo-wcklinic.or.jp